

備前市の海めぐみ

日生漁業の歴史

日生は瀬戸内海に面し、多くの島々から成り立っています。陥没して出来たこれらの島々を擁する海は、絶好の魚礁となり、リアス式の海岸は寒河・日生に天然の良港をもたらしました。そこに住む人々は縄文・弥生の昔から漁業を生業としてきました。

平城京から出土した日生からの木簡は、塩を納めた荷札であろうと考えられています。また、室町時代中頃には、日生からナマコを積んだ二艘の船が兵庫の北関に寄った記録があり、近隣だけでなく京・大阪にまで魚を売るほど漁業の村として発展していたことがうかがえます。

江戸時代の初めには日生・寒河で約500石の米がとれており、農業との兼業で魚を獲っていたようです。当時は灘、虫明布浜から室津、小豆島中海までの日生近海が漁場でしたが、江戸末期には近海の魚が減少し、サワラを獲る流瀬船が阿波・讃岐・淡路・播磨まで300隻も出漁するようになりました。そして日生船の獲ったサワラは、大阪魚市場で「魚島サワラ」と呼ばれ、高値で取引されました。

明治期、日生漁民は愛媛県四国島から山口県三田尻、大分、福岡、徳島、和歌山、また伊勢湾まで出漁していました。

日生漁業組合を結成し、魚市場を設置し、新時代に即応した漁業を展開していましたが、「漁業法」の施行により他県へ出漁することが制限され、魚も減少したことから、目を海外に向けるようになります。

朝鮮へは明治20年に川崎甚平・甚九郎兄弟が、続いて戸長真殿伊治が120人を率いてと、出漁が盛んになります。絶影島、方魚津、浦項、筏橋、羅老島に根拠地をつくり、やがてその地へ定住しました。その中には魚を獲るだけではなく、魚の加工をしたり、雑貨屋、漁具屋、洗濯屋、電気屋を営む人もいました。金谷一二・大介兄弟のように精米業から農場経営と、満州だけでも2000町歩の農地を持つまでになった人もいます。そして魚を日本へ運搬するための仲買組合をつくったり、林兼（大洋漁業の前身）と



韓国蔚山広域市東区方漁津港（手前の湾）

共同で魚の運搬に従事する人々も現れました。朝鮮の人々と彼等は、「共に人間」と共存共栄をはかり、融和の中で発展していきました。

太平洋戦争終結後、朝鮮からの引揚者は、501人という多数に上りましたが、混乱を極める中、日生引揚者の多くは家屋敷・家財道具等を使用人に与えました。このとき朝鮮の人々は「帰るな、帰るな」と涙を流して別れを惜しんだといいます。また、戦後日本に引き揚げた人々が、韓国を第二の故郷とし訪問団を組織して訪れた時、家族が再会したかのごとく抱きついて喜びました。このほかにも大連、台湾、マニラ、シンガポールなど100人以上の人々

が海外に進出し、世界への夢を実現させてきました。戦後は海外漁場を失い、国内漁場の制約も厳しくなったことから、漁協や魚市場を立て直し、養殖漁業も手掛けるようになりました。

漁協には婦人部・青年部を創設して後継者を育成し、「浜売り」では漁業者と消費者を直結しました。また、共同出荷により大阪・東京の市場に進出し、新鮮で安価な日生の魚を提供するなど、常に他に先駆けて漁業の発展を図ってきました。

養殖漁業は片岡松吉氏が提唱し、昭和32年の現寺湾でのハマチ養殖を先駆けとして、車エビ・ノリ・カキ等の養殖に積極的に取り組み、社会科の教科書にも取り上げられました。そしてサケ・マス漁の専用船を漁業組合が建造して北洋へ新漁場の開拓をするなど、日生の漁業は先人の英知を受け継ぎ、戦前の真殿伊治・吉形忠治、戦後は有吉敏治・岸本辰夫・坪本正一・本田和士氏等代々の指導者の素晴らしき先見性と指導力のもとにさらなる発展を遂げてきました。

（加子浦歴史文化館 令和元（2019）年12月9日）



昭和31年頃 伸洋丸初の遠洋漁業へ出港



昭和32年 日生北洋サケマス漁船伸洋丸
（出典：岡山県立記録資料館）

日生町漁業協同組合の取り組み

○アマモ再生事業

昭和25(1950)年ごろには590haのアマモ場が日生の海に広がっていたのが、昭和55(1980)年には工業廃水等で海底はヘドロだらけになり、たった12haに減少し、アマモの森はほとんど姿を消してしまっていました。

カキ殻を海底へと沈めた上にアマモの種を撒くことで再生が進み、5年ほどで70haにまでアマモ場が広がっていきました。平成19(2007)年に80ha、平成23(2011)年には200ha。平成27(2015)年に250ha、令和6(2024)年には270haにまでアマモ場は回復しています。

今では漁業者と中・高校生、地元市民、地域企業や行政が協働した市民参加の取り組みへと進化しています。



全国アマモサミット 2016 in 備前

○チヌ(クロダイ)

全県的に、カキの稚貝や海苔を食べてしまうチヌの「食害」が目立っています。

チヌは美味しい魚でかつては高級魚でしたが、鯛や他の魚に押されチヌを食べる量が減り、値段が下がったため漁業者もあまり獲らなくなっていました。このため、個体数が増え、カキの稚貝や海苔を食べる被害が増えました。

日生町漁協ではホタテガイに付けたカキの種を重ねて垂下するなどの対策を講じたほか、チヌを加工した日生の漬け丼を開発するなどしたことで、徐々に価格も上昇してきたため、漁師さんの漁獲量も増えました。このように自然や海のバランスを保つ努力がなされています。

○サワラ回復計画

日生町漁協で1985年に約111.5トンあった漁獲量が、2001年に約4.2トンまで激減しました。そこで、岡山県・兵庫県・香川県3県の協力で、5つの漁協で稚魚を育てて放流する「サワラ資源回復計画」を進めています。

サワラの稚魚は生け簀でエサをもらいながら、稚魚は10cmほどに成長するまで大切に育てられ海に放流されます。稚魚たちはアマモ場に守られながらさらに大きくなり、秋ごろには60cmほどまで成長するサワラたち。そこから外海へと移動し、そして来年の春にまたふるさとの瀬戸内海に戻ってきます。

2002年に稚魚の放流やサワラ流網の目合いの拡大や秋漁の禁止を始めた結果、2005年には日生町漁協の水揚げが約20.9トンにまで回復、近年は約30〜60トンを保っています。

渚の交番 ひなせうみラボ

令和3(2021)年9月27日、備前市日生町頭島に「渚の交番 ひなせうみラボ」がオープンしました。「渚の交番」は、豊かな海を次世代に引き継ぐための地域づくりの総合拠点となることを推進する、日本財団のプロジェクトです。

渚の交番ひなせうみラボは、地域内外の子供たちにも親しみを持って施設を活用していただきたいという思いを込めて、日生(ひなせ)と海(うみ)を平仮名表記としました。また、海洋環境の研究機関でもあることから、研究機関(ラボラトリー)の略語である「ラボ」と名付けました。

アマモと牡蠣の里海である頭島を学びのフィールドとして、日生ならではの多彩な海洋プログラムの体験を通じ、日生の豊かな海を次の世代につないでいくことを目指しています。



渚の交番 ひなせうみラボ

漁業協同組合の変遷

◇日生町漁業協同組合

明治35(1902)年 日生漁業組合設立
 昭和16(1941)年 日生漁業会
 昭和24(1949)年 日生町漁業協同組合
 昭和32(1957)年 北洋サケ・マス漁業
 昭和36(1961)年 カキの養殖
 昭和42(1967)年 車エビの養殖



昭和30年代 日生町漁業協同組合事務所

◇頭島漁業協同組合

昭和24(1949)年 頭島漁業協同組合設立
 平成15(2003)年 日生町漁業協同組合と合併

◇伊里漁業協同組合

明治35(1902)年 穂浪漁業組合設立
 昭和19(1944)年 穂浪漁業会
 昭和24(1949)年 伊里漁業協同組合
 昭和52(1977)年 鶴山村漁業協同組合と合併
 平成11(1999)年 真魚市開始



毎週日曜日の朝開催の真魚市

◇鶴海漁業協同組合

明治35(1902)年 鶴海漁業組合設立
 昭和19(1944)年 鶴海漁業会
 昭和24(1949)年 鶴山村漁業協同組合
 昭和52(1977)年 伊里漁業協同組合に合併

◇片上漁業協同組合

明治36(1903)年 片上漁業組合設立
 昭和19(1944)年 片上漁業会
 昭和24(1949)年 片上漁業協同組合
 昭和52(1977)年 浦伊部漁業協同組合、久々井漁業協同組合と合併し、新組合は備前漁業協同組合
 平成15(2003)年 備前漁業協同組合解散

◇浦伊部漁業協同組合

明治36(1903)年 浦伊部漁業組合設立
 昭和19(1944)年 浦伊部漁業会
 昭和24(1949)年 浦伊部漁業協同組合
 昭和52(1977)年 片上漁業協同組合、久々井漁業協同組合と合併(新組合は備前漁業協同組合)

◇久々井漁業協同組合

明治36(1903)年 久々井漁業組合設立
 昭和19(1944)年 久々井漁業会
 昭和24(1949)年 久々井漁業協同組合
 昭和52(1977)年 片上漁業協同組合、浦伊部漁業協同組合と合併(新組合は備前漁業協同組合)

〈参考資料〉

- ・ 和気郡誌
- ・ 日生町誌
- ・ 備前市ホームページ(加子浦歴史文化館)
- ・ 日本財団ホームページ
- (2021.9.29プレスリリース)